

令和5年度第1回 静岡市立芹沢銈介美術館協議会 会議録

- 1 日 時 令和5年9月16日(土) 午前10時から12時まで
- 2 場 所 静岡市役所駿河区役所3階 大会議室
- 3 出席者 <委員>※選出区分、五十音順  
白井委員(途中参加)、山本直委員、月森委員、山本香瑞子委員、  
板倉委員、片井委員、大橋委員、稲垣委員、佐藤委員  
<事務局>  
望月文化振興課長、久保田館長、白鳥主幹、石川主査
- 4 欠席者 本田委員
- 5 傍聴者 0人

6 議 題

- (1) 会長及び職務代理者の選任について
- (2) 令和4年度入館者状況について
- (3) 令和5年度事業について
- (4) その他

7 会議内容

- (1) 開会 ※委員過半数以上の出席により会議成立
- (2) 文化振興課長挨拶
- (3) 委嘱について
- (4) 委員自己紹介
- (5) 事務局職員紹介
- (6) 議事

①会長及び職務代理者の選任について

(事務局久保田館長)

まず、次第の(1)会長及び職務代理者の選出についてですが、静岡市博物館条例第12条第2項の規定に基づき、協議会の会務を総理し、協議会を代表する会長の選出は委員のみなさまの互選により定めることとなっております。みなさまからご推薦をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

(板倉委員)

前期も一緒にやってきた大橋委員にお願いできればと思います。大橋委員を、当協議会の会長に、ご推薦申し上げます。

(事務局久保田館長)

ただいま、板倉委員から会長を大橋委員にというご推薦がありましたが、大橋委員に会長をお願いするということですのでよろしいでしょうか。(委員全員承認)

委員の皆さまよりご承認をいただきましたので、大橋委員、よろしく願いいたします。それでは、これからの議事進行をお願いいたします。

(大橋会長)

大橋です。会長を務めさせていただきます、みなさまにおかれましては、当会の議事進行に、ご協力よろしく願いいたします。

議事に入らせていただく前に、静岡市博物館条例第 12 条第 5 項により、あらかじめ職務代理者を会長が指名することになっております。私としては、長らく、この協議会の委員と一緒にやってきている、本田委員を職務代理者に指名したいと思っています。本日、本田委員は、欠席しておりますが、本人より、指名されれば、受諾する旨の返事をいただいております。

みなさま、本田委員の職務代理者就任について、ご承認いただきますよう、お願いいたします。(委員全員承認)

次に、本日の議事録署名人ですが、片井委員にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(片井委員)

片井です。本日の協議会議事録の署名人を、お受けいたします。

(大橋会長)

ありがとうございます。それでは、議事の方に移らせていただきます。本日の議題は、4 つ項目が設けられています。一つ目の会長等の選任については終了しました。2 つ目の「令和 4 年度入館状況について」、3 つ目が「令和 5 年度事業について」、そして 4 つめに「その他」ということで、皆様の提案やご意見をうかがっていきたいと思います。

では、議題(2)「令和 4 年度入館状況について」事務局からご説明願います。

## ②令和 4 年度入館者状況について

(久保田館長、白鳥主幹) ※「令和 4 年度事業実施状況」について説明

(大橋会長)

ただいまの事務局からの説明に対してご質問、あるいはご意見はどうでしょうか。

先ほど望月課長からお話がありましたけど、ここのところ入館者数が増えているということで、今後も増加することを期待しながら議題は次に移りたいと思います。それでは、議題(3)令和 5 年度事業実施状況について事務局からご説明をお願いします。

## ③令和 5 年度事業について

(久保田館長、白鳥主幹) ※「令和5年度事業」について説明

(大橋会長)

令和5年度の活動の報告でしたけど、今年も4つの企画を立て、かつ展示するのは、なかなか限られた人数の中で大変なことだと思いますけれども、非常に充実した内容で大変期待しております。個人的には第1回を拝見しました。今回のも拝見するつもりですが、まだ見てないので、この後は是非拝見したいと思います。皆様から今の事務局からのご説明に対してご質問、あるいはご意見お願いいたします。

(山本香瑞子委員)

質問というか感想になってしまいますが、いつも芹美の展示は私も楽しみに拝見しております。今、白鳥さんのお話の中でアイヌが非常に人気があって、収集品の図録も売り切れているというお話がありました。展覧会が賑わっている印象はあったんですけども、そんなに今アイヌが人気になっていることを私も勉強不足で知らなかったものですから、その他にも日々展示をされている収集品や芹沢銈介の作品の中で、最近人気になってきているものの変化や傾向など、現場で感じてらっしゃることがあったらお聞かせください。好奇心のような質問で申し訳ないですけども気になりました。それから、今回は染紙の特集の展示を拝見しました。染紙の四つ折りのクリスマスカードを広げて、壁一面に並べまして、染紙の全体像が見えるように展示してありました。頭の中で四つ折りにしたらこういう柄なんだなど、でも開くとこんなふうに絵が繋がっているんだということがわかって非常に興味深かったです。そういう展示の創意工夫が毎回素晴らしいなと思って拝見しているのですが、どうやってアレンジするのか、着想するときのきっかけといいますか、どうしたらそんな素敵な展示ができるのかをお伺いしたいと思います。

(大橋会長)

プロ同士の質問で大変興味がありますね。

(事務局白鳥主幹)

先ほどの収集品の図録でいうと、たぶん増刷しているのはアイヌだけになるんですよね。日本の仕事着で13集になりますけど、まだまだ入りきれない芹沢先生の収集品が非常に素晴らしいということもありますけれども、全体的に工藝に対する関心がすごく高まりが維持されているなという感じがしますね。あと変化といえば、芹沢先生の見方に対する変化はものすごく感じますね。協議会でも申していますが、20代30代の方の来館がすごく増えたと思うのと、特徴的なのは、若い男性が一人で来られる姿をよく見るようになったので、それは大きな変化として感じています。あと展示の方は、もちろん展示の計画をしっかりとしているのですが、結構、最後の最後までやり直していますよね。だから、クリスマスカードのところも、ああいう形で展示をするというのは計画として考えてはいるんですけど、縦に何枚並べ、横に何枚並べというのは実際に展示してみないと分からないし、やってからあそこも3回くらいやりかえていますね。でも、四つに折りたたむものなので、折りたたんだ姿が必要だと思うんですよね。だからそれもやっぱり必要なんじゃないか

などというので、前に出したりとか、本当にしつこくやりかえるのが一番大変なところかなと思っています。前も申し上げたんですけど、自分自身がずっと展示とかをやることについて思っているのが、私は直接芹沢先生にお会いしたことがないんですよね。高校一年生のときに先生が亡くなられたので、お会いしたことはなくて。ただ、先生のお弟子さんの四本先生、芹沢銈介美術館の最初の10年間は四本先生が中心になって展示をされていたので、四本先生には何回かご指導を受けたことがありますけど、2007年に亡くなられましたけど、今も展示しながら、この展示を今四本先生が見に来たら何と言うだろうか、ということをいつも考えていますので、芹沢先生にはお会いしたことはないですけど、芹沢先生が見て叱られるような展示にはしたくないし、先生から見たらどうだろうというのはいつも考えているところで、自分の発想でなんとかというよりは、結局、先生だったらどういうふうに展示するのかとか、どうされたら満足するのかとか考え続けているというところかなと思うんですけど、お答えになっていないかもしれませんが、すみません。

(山本香瑞子委員)

芹沢銈介先生の全仕事を後世に伝え続けるという使命感が、展示の隅々にまで行き渡っているのですね。非常に今のお話に感銘を受けました。ありがとうございます。

(大橋会長)

展示については、ここでも何度か話題になってきましたけど、まず展示数が多い、それから形態が大小様々ですし、材質技法も含めて様々なものを一つのまとまった展覧会にするのは大変だろうなと素人ながらにいつも感心しています。その背景は色々あるとは思いますが、先ほどの話で出た四本先生が芹沢銈介のお弟子さんでいらっしやいます。私も大学でその魂や展示について全く学んでおりませんが、折に触れ芹沢の話はありました。ただ、晩年に少しだけ芹沢にお会いすることがありまして、私の印象はただおっかない爺さんだったというだけで、教わったものは何もないですけど、ここでも何度かお話をしましたけど、倉敷で芹沢コレクションだけを集めた大展覧会をやったときに展示の一部を手伝いましたけど、大変でした。もちろん僕が大変というよりも、芹沢先生にも何日間かに渡って、最後の方はほとんど寝ないで展示をされた。80いくつだったと思いますけど、周りの人なんかほとんど寝ないで展示を続けられて、それほど徹底して全体はもちろん隅々まで目を通して、最後の最後まで開館1分前までじっと見届けますけど、たぶん白鳥さんもそれをお聞きになってそこを目指してやってらっしゃるのかなと思います。

(大橋会長)

それでは、他にご質問やご意見ございますか。

(山本直委員)

聞き逃したかもしれないですけど、バルセロナでの展覧会、すごいと思うんですけど、どういうきっかけで、向こうとしてはどういう流れの中でこのことを企画したのかご存知のところがありましたらお聞かせ願えればと思います。

(事務局白鳥主幹)

企画されたのは、バルセロナ自治大学のリカル・ブル先生という方ですけど、今、ものすごく民藝運動を勉強されている方で、本当にすごい知識をお持ちになってらっしゃいます。セラさんという方がいて、その方が戦前に実はスペインから昭和 10 何年かくらいに日本に遊びに来て、ところがスペインに内戦がありスペインに帰れなくなってしまって、その後終戦をまたいで昭和 20 何年かまで日本にいらして、その間に民藝運動と関わりを持たれて、様々な日本の物をスペインに持ち帰られたそうです。そのセラさんの大きなコレクションがずっとほとんど手付かずのまま残されていたのをリカル・ブルさんが発掘して、それで今整理をしっかりとしているわけですけど、その中に芹沢先生の作品もあったんです。確かリカルさんが最終的に静岡にいらしたのは 2019 年だったと思うんですけど、もしくは 2018 年ですけど、コロナ前に一度お会いをして、セラさんのコレクションの中に芹沢先生の作品があるんだけどどうだろうかという写真を見せてもらったりして、相談にいらっしやっただのが 2019 年だったかと思うんですけど、その後そのコレクションの中からリカル・ブルさんのキュレーションで濱田庄司先生とアルティガスというスペインの陶芸家がいるんですけど、その二人に特化した展覧会をカタルーニャ美術館で開催を先にしたんですね。そのときに芹沢先生の作品も一緒に展示をされていて、こんなに芹沢先生の作品もあるんだなとちょっと思っていたんですけど、昨年度後半くらいから芹沢銈介で展覧会をやりたいというようなメールが来るようになりました。セラさんのコレクションの中には本当に色々な種類のもものがあって、中には芹沢先生の作品と言いつつもそうではないものもあって、その辺はアドバイスをさせていただきながら、今回の展覧会につながったということになります。ちょっと説明があまりよろしくないですが、ひょっとしたら月森さんの方がご存知ですか。

(月森委員)

私もそれほど詳しくないですけど、ミロも結構民藝に興味があったそうでここ最近日本民藝館にもスペインからその手の話が来ています。このバルセロナのことで今、白鳥さんからのお話を聞いて私も感じたのは、芹沢先生の作品はたぶん説明がなくても誰でも美しさがわかる作品だと思います。濱田庄司だとか河井寛次郎作品よりも、芹沢作品とか棟方志功作品の方が、比較的感動しやすいと思います。芹沢先生のパリ展もそういう理由で大成功したのではないのでしょうか。ですから、さっき白鳥さんが世界的な作家、すでに世界的な芹沢だと思いますけど、ますます世界的に広がっていく第一歩とおっしゃいましたけど、私もそれを感じます。それから日本民藝館でも最近芹沢展は入館者数が増えています。これは今言ったように色々な説明や理論抜きに、感動される方が多いからではないのでしょうか。それから、アンケートにも書いてありましたが、やっぱり古さがないですよ。普遍的というか、本当に初期の作品から晩年の作品までずっと高いクオリティーを持続していて、いつ見ても新鮮で。ですから、静岡の人はすごい美術館と作品を持っていると認識してほしいです。入館者数がちょっとずつ増えているのも、その兆しだと思うんですね。だから面白いことになっていくんじゃないかなと思っています。

(大橋会長)

バルセロナ展については、詳しくはもちろん全然知らないですけど、前回やったときかな、白鳥さんが全部そこで持っているものだけで展示になっているというのにびっくりしました。そういうことが世界であっちこっちにあるんだなということがある意味では驚きだったんですけど、今お二人からお話があったように、世界にすでに評価されていらっしゃる方がある程度いる。それが少しずつ表に出てきたら、白鳥さんが前からおっしゃっている世界で芹沢展やりたいなというのが、少しずつ実現に向かっていくんじゃないかと思うと、ある意味驚きと期待を込めた展覧会だったと思います。白鳥さん、これはもちろん見に行っていないですよ。

(事務局白鳥主幹)

はい、行っていません。

(大橋会長)

行ってきたらいいなど。写真とかで中身のある程度見ていると思うんですけど、私達が知らないものもあるんですか。そんなことはないですか、芹沢作品で。

(事務局白鳥主幹)

今まで知られてなかったというのではないかもしれませんが、構成的にすごく珍しいとか、例えば、沖縄風物という絵本がありますけれど、それを見開きの1ページずつを縦に三つ並べて掛け軸にしたりとか、それもやっぱり地が藍で染められていたりあれってすごく色鮮やかな作品ですけどそれが藍で染められていたり、珍しい配色の作品、構成の作品がありましたよね。あと、まだ相当あるとみえて、会期の一か月くらい前に風の字のれんとか山水の字のれんとか、その辺が出てきたということで、それが展示のメインになったようですけど、それくらいものはまだかなりあるようですね。

(大橋会長)

びっくりですね。

(稲垣委員)

調べたらちょいちょい出てきます。スペインの美術館のホームページ。メインビジュアル。

(大橋会長)

ホームページが確か見ることができると思いますので、便利なことに日本語に訳したものも見られるので、ぜひご覧になってください。他にご意見ございましたらお願いします。

(稲垣委員)

すごく些末なことですけど、さっきアイヌの話が出ていらして、若い男性が一人で見に来るという話をおっしゃっていたんですけど、なぜかという話で、ゴールデンカムイという漫画を皆さんご存知でしょうか。ゴールデンカムイという漫画があって、アニメにもなっていて、今とても若い方に人気があるのでそれを見てという人がいるのだと思います。何の話かという、アイヌの文化の話を掘り下げて、アイヌの文化を読み解くというキャッチが付いているような漫画です。私のところへ

来る若い人達もアイヌの話をするので必ずこの話が出るので、要するにビジュアルから入っているので、多分図録なんかも買いたいと思うので、それを楽しんでいるものですから。

(大橋会長)

先ほどお話が出たように、アイヌ人気はそれも含めて、北海道に新しい博物館ができたり、昨年か一昨年に大きなアイヌ展もありました。その余波がまだまだ続いているんだなと思っております。改めて芹沢のコレクションを見た方は、アンケートを見ても、芹沢のコレクションが半端じゃないということに驚いてられる方が随分いらっしゃるのは、実際のコレクションの重要性はあるんじゃないかと思えます。それから若い方が増えている、ここ数年ずっとお話いただいていた大変いいことだと思います。若い男性が一人というのはなかなか今の世の中の何を反映しているのか分かりませんが、大変興味深い。確かアンケートだったと思うんですけど、20代の神奈川の男性がアンケートに「小川、八雲、法然、津村」、ちょっとわからない文字があって、そして「文字」それだけを書いた男性がいらっしゃって、初めてなのちょっとわかりませんが、芹沢を知っての上なのか、印象に残った作品のタイトルの頭だけ並べて帰られた方がいたのが印象的だったと思います。他にご意見ぜひお願いいたします。

(片井委員)

先日、来館させていただいたときにも、そのときにスペインの方がいらっしゃって、先ほど白鳥さんのところで話をしたんですけども、そのときに通訳の方が付いていらっしゃって、そして白鳥さんが説明していたということを私は見ていたんですけど、逆に外国から来られる方がますますコロナが収まって増えると思うんですけど、あったらすみません、このパンフレットって外国語バージョンがあるんですかね。

(事務局)

英語はあります。

(片井委員)

他の国のものは。

(事務局)

中国語は、繁体字はありませんが、大陸の方の中国語（簡体字）があります。

(片井委員)

分けられるものがあれば、より多く外国の方が来やすいのかなと思いました。あと質問が、6ページの石水館の修繕の実施は、どこを修繕されるのか教えていただきたいです。

(事務局石川主査)

今年度につきましては、設置から20年以上たち経年劣化している展示室の空調機をまず取り換え修繕をさせていただくと、開館当初に設置され42年以上経過しております非常用の発電機についても、取り換えをさせていただく予定です。また、次年度に向けても特に経年劣化が激しいところを優先的に徐々に行っていく予

定で、予算交渉など行っているところになります。以上です。

(片井委員)

中庭の見える部屋で、梅を何気に見たときに、室内の天井の柱にちょっと虫食い跡があるようだったので、早めに対処いただけたらと思いました。あと、先ほど月森委員が言われていたように、言葉がなくても分かる作品というのがすごく特徴だと思って、私は小さい頃からそういうものに触れた子達って、こうでなければならぬという枠が外れるきっかけになるんじゃないかなと。どういうふうに表示してもいいんだということをおの作品を見ただけで分かるんじゃないかなと思って、学校で登呂遺跡とかは絶対に行くんですけど、芹沢銈介美術館ってなかなか。教育の中にそういう来館する機会を取り入れて、学校と話し合いの中でぜひ小さいうちに芹沢銈介の作品を見ていただきたいな、見させてあげたいなと感じたので、学校への働き掛けもしていただきたいなと親として思いました。よろしくをお願いします。

(大橋会長)

ありがとうございます。

(事務局久保田館長)

そうですね。要するに若年層から芹沢銈介美術館の方にというところの関係ですけど、それに関係あるのかと思うのですが、去年から来館者数が増えているというところに関して、去年あたりから学校で来てもらうというところに関して、たぶん令和3年度くらいから受け入れのほうを再開した中で、学校単位で来ていただくのがかなり増えてきています。去年あたりから増えてきて、今年はこれから秋にだいぶ予約が入っています。ただ、それも基本的に登呂博物館に来てもらったついでにきているというのもまだ拭えないのかなというところがあります。なので、そういうところで我々も教育委員会にもぜひ芹沢銈介美術館に積極的に学校で来てもらう取り組みを働きかけているところでございます。またよろしくお願ひいたします。

(大橋会長)

学校単位でというお話がありましたけれども、単位というところの程度の規模ですか。例えば、クラスとか。

(事務局久保田館長)

だいたい学年で、1回で30人〜50人くらい来られますので、たぶん2クラスくらい見えられるのかなという感覚です。

(大橋会長)

前も団体でという話が去年か一昨年に出まして、団体で来てパッと帰るのはどんなものか、みんなちゃんと見ているのかなというようなこともありましたけど、そういう意味では1クラスとか2クラス単位で来て、どなたかの適切な指導を受けながら見ていくことが子供の場合には必要なのかなと感じます。

(山本直委員)

せっかく登呂博物館とかとセットで行けるので、ローテーションするような形で少ない人数が交代で入ってくるような、そういう仕組みを学校の方に提案されたら喜ばれるのかなと思います。

(佐藤委員)

私は、教員のとときに実際に生徒をセンチュリーの中に美術館がまだあった時代ですけれども、2クラス連れて行ったんですが、その時に実は初めて小中学校生は入場料がタダになることを知ったんです。案外そのことを周知されてない面もあるのではないかなと思うんです。ですので、1クラス単位でも2クラス単位でも、タダで見られるんですよと、それから申請書類1枚出すだけでいいんです、という周知もやっぱり何らかの形で改めて必要なとその時に思ったんです。

(事務局久保田館長)

先ほども学校単位で来る、少人数で来ていただくような、来やすいようなシステムを作るというところも合わせて、市内の小中学生は無料で入れる。それで学校の先生が付き添いでくる場合には減免申請という形で出してもらえれば無料で入っていただくところになりますので、そういうところも含めてどういった形で学校が来やすいかというのも含めて、もともと芹沢銈介美術館は静岡市の教育委員会が所管していた時代もあるので、今も関わりがあるものですから、市の教育委員会を通じて各学校に積極的に我々もPRを行っていきたいと思っております。

(大橋会長)

よろしく願いいたします。

(板倉委員)

今の学校団体のことについてですけど、受け入れる側にもそれなりに仕組みというか、どういうふうに受け入れていくかというものが必要になるかと思うんですけど、そういうものに対するプログラムみたいなのはあるのかどうかをお聞きしたいです。

(事務局久保田館長)

学校側ということですか。

(板倉委員)

芹沢銈介美術館側が受け入れる立場であると思うので、そのときにどういったものを用意できているのか、体制というか。

(大橋会長)

例えば小学校の1クラス、2クラスが見に来た場合はというような。

(板倉委員)

そうですね、人数的なものもたぶんそんなに大きな美術館ではないので何人以内だとか、何年生以上とするのかどうかとか、そういった学校、団体を受け入れる用のあるものがあるのかというところです。

(事務局久保田館長)

内容的にどういった方々をどういうふうにするかという決まっているものは持ち合わせてはいないです。学校からそういう要望、希望があったときに、事前の話し合いの中で1回に何人受け入れますよ、館内での説明が必要であれば付けますよ、こちらの方を用意しますよ、どういう内容のところの説明をしますよというところを、あくまでも学校は特別に事前話をしているという段階です。確かに板倉委員がお

っしやる通りこちらもどういう形で受け入れるのかイメージ持ちながら、予め内規的に持っているべきなのかなとは考えておりますので、すみません、今日これを課題として持ち帰らせてもらいます。よろしくお願ひします。

(大橋会長)

これは難しい問題であったと思うんですけど、学芸員が対応しようとしてもほとんど人数的には限られていますので、対応がかなり厳しいと思いますけど、とにかく連れていらっしやる先生方に予めそのときの展示の中の内容が溢れている点も何かで伝えるとかそういうことがあれば、美術の先生が説明するというそういうことができるのかもしれないし、何か対応策がもしこうした特に小学生や中学生の来館者を増やそうとした場合には対応していかなければならないと思います。静岡市美術館の場合はそういう対応策は何かあるのですか。

(山本香瑞子委員)

静岡市美術館の場合には、開館当初から子どもたちへの解説を学芸員が直接するというのを掲げて、「ミュージアム教室」という一つの事業として位置付けてやっておりますので、そのために人員、人数を揃えているところがあります。なので、芹沢銈介美術館とは前提が違いますが、実際当館でやっていることをお伝えします。まず一年間の展覧会のスケジュールを4月の校長会に持っていきます。学芸員とは別に、広報担当が二人おりますので、その広報担当者が校長会へ出向いて、今年の展覧会の中では、小学生だったらこれがおすすめですよ、中学生だったらこれがおすすめですよ、そういうのを4月に営業に行きます。ホームページに申込 FAX のフォームの PDF がございまして、それを先生方にダウンロードしてもらって申請書を出してもらいます。事前に必ず電話で解説のあり、なしの希望とか、日時の希望を確認してから申請書を出してもらうようにしています。学芸員による 30 分程度の解説がある場合、それから 10 分程度の概要説明の場合、あるいは解説なしで学芸員ではなくフロアスタッフが美術館でのマナーについて簡単に説明する場合と、そのような三種類のパターンがあります。それを週末に学校の美術部が利用するとか、あるいは、学年で利用される場合には一度に大勢がいらっしやるとうやほり混乱するので、半分ずつ時間差で来てくださいとか、事前に相談しながらやっております。ですが、学芸員が休みであったり出張であったり、いないときもありますので、そういうときには解説なしでの対応にする場合もあります。100%解説の希望には答えられていないですけど、そういう状況です。今後の課題としては、学芸員が個別に説明するというのはやはり回数に限界があるため、動画などを作って代わりに事前学習に使ってもらうとか、何かそういう ICT を活用した解決方法を模索していかなければいけないかなと考えています。ただその動画を作るのにも大変な手間がかかるものですから、何が一番いいのか我々としても悩んでいるところです。

(大橋会長)

ありがとうございました。お願ひします。

(佐藤委員)

小中学生をたくさん呼びたい、見せたいということなんですけれども、要するに

小中学生が見ることの決定権は教員にあるんですよね。小学生が見たい、中学生が見たいって声が上がって来ているということはまず起こらないと思うんです。そうしますと、やはり宣伝活動としては小中高の教員向けにしっかりと魅力を説明する、そういうことが一番小中学生に向けては手っ取り早いと思うんです。ですので、私、応募の文章の中にも書きましたけれども、確か他県の市立の美術館だと思いましたが、夏休みを中心に教員を招待してしまう、何度も教員に対しての説明会をやる、というようなことを行っていく。そういうことをやっていくのが、ひいては小中学生の利用を増やすことに繋がっていくのではないかと思うのですが。小中学生をターゲットにするのは非常に大事だと思います。あとは、やっぱり高齢者は時間がありますので、その辺をどういうふうにターゲットにして見てもらうかということ。さらに若い世代をターゲットにしていくのはどうか。それぞれの年代別の作戦を緻密に練ってみてもいいのではないかなと思っています。

(大橋会長)

ありがとうございます。

(山本直委員)

簡単にいうと学校で外に出るといのは何時間か掛けてバスを借りて、遠足なんですよね。遠足のコースとして芹沢銈介美術館に来たときにぎゃーぎゃーやったら、怒られた。そういう場所じゃないということで、遠足の行き先でつまらなかったという感想が生徒から出る、そういう構図があると思うんですよ。登呂博物館の野外施設だとか、そういうところと館内の静岡市歴史博物館とそれと芹沢銈介美術館を組んで、こう使ったら遠くから来ても遠足でも楽しめますよみたいな、そういうモデルプランみたいなのを登呂博物館と一緒に組んで、作ったらどうかなと思います。

(大橋会長)

登呂博物館との関係は毎回話に出て、なかなか具体的なプランが出てきませんが、今、特に学校に向けたり、高齢者に向けたプログラムが必要かと思いますが、静岡市美術館のお話を伺うと規模や何かと違いが歴然と見えてまいりまして、同じ市立なのについて僻んでしまいそうになるのですが、圧倒的な人材不足、予算不足といえますか、これはもう毎回色々な話が出てそれが結果的には、例えば、芹沢銈介美術館の中、特に日常的に美術館の色々なことを知っている学芸員のレベルじゃある意味ではどうにもならない。そこで新しく来られた館長、望月課長にこれはもっと上の方だと毎回言っても、これもまた結論が出てきたことが一度もないですけども、そうぜひ申し上げたいと思います。変な言い方ですけど、私、結構、6年目か7年目になってしまっているんですけど、館長とか課長はいつも入れ替わっていますよ。むしろ私たちの方が長いくらいの中で、今申し上げたようなことがどこまで伝わっていくのかというのは、本当に長くやりますと大変残念な思いで意見を申し上げ続けています。これは解決はそう簡単にはいかないと思いますけれども、静岡市の美術館単体ではどうにもならないものというのが大きいと思います。是非何かこの先も持続的にご検討いただきたいと思います。

(事務局望月課長)

今の件については私からお話させていただきますけれども、やはり課題となっております。一応、増員要望という形で出しております。同じ文化振興課所管の施設ですが、静岡市美術館との大きな違いは、市美術館は指定管理制度をやらせていただきまして、一方こちらは直営で運営しているという部分があります。市職員の数を増やさないとならないというところがありまして、採用試験も検討しているところですけど、白鳥さんから館長からも色々話を聞いておりまして、私の上司にあたる人達もやはり課題と思っているものですから、そこはなんとか実現に向けてやっていきたいという形で動いているところですけど、全体の市職員自体が減っているところがありまして、どこの所属も結構きつきつの中でやっているというところがあります。ただ芹沢銈介美術館については収蔵品を持っていて、芹沢銈介さんという先生のお名前を冠にした美術館というところもあるものですから、そこをちゃんと大事に伝えていくことを心掛けておるところです。また色々白鳥さんから話を聞きながら、交渉していきたくと思っています。皆さんからもすみません、ありがとうございます。何とかやっていきたいと思うのですが、長年にわたり要望を出している状況ではあります。すみません。本当に皆さんのほうが長いので、流れをよくご存知の中だと思うんですけど、なんとか次の一歩に進めるように今交渉中というところ。すみません、色々ありがとうございます。

(大橋会長)

ありがとうございます。よろしくお願いします。

(事務局望月課長)

こちらこそ、改めてということで、さらに後押しになりますので、追い風という形でございます。

(月森委員)

すみません、顰蹙を買ってしまうような話になってしまうかもしれませんが、今皆さんは小中学生を美術館にという方向でお話されていると思うんですけど、私は個人的にあまり積極的じゃないですね、そういうことに関して。芹沢銈介美術館と日本民藝館でさっき私説明がなくてもわかりやすいと言いましたけど、それって非常に難しいことなんです。例えば、先ほど山本さんが騒いじゃいけないとか、あまり面白くなかったという感想が出るとおっしゃいましたけど、おそらくそういう人もいます。子どもが来館した時にそういうこともいっぱいあると思うんです。私の子どもどものときの感覚で言えば、美術とかそういうものが好きな子どもって1クラスに一人とか二人くらいですよ。そういう子どもたちが行きたくない所に行きなり連れてこられて、美術館に入って、見て、どうなのかなというのがあるんですよ。民藝館にも小中学生が来ます。それから親が子どもを連れて民藝館に来る人もいっぱいいます。そのような子どもたちを観察していると嫌で嫌でしょうがない、早く帰りたいという感じです。他の来館者にとっても迷惑な場合もありますし、皆さん無条件で小中学生を連れてくるのに積極的な感じに伺っていたんですけど、その結果どういうことになるのかな、というのを逆にお聞きしたいと思いました。み

なさんの話の腰を折るような内容で申し訳ありません。失礼しました。

(大橋会長)

子どもを強制的に連れてくるということは美術館にとって、あるいは美術を鑑賞することがどういうことかを深く考えないといけないと思います。一方では、静岡市の宝、その存在そのものをできるだけ若いときから知らせておくのも一つの方向かなと思います。その価値についてどこまで伝えられるかは難しいところですけど、静岡市の中にこういうものがあることは伝えていったほうがいいんじゃないかなと思います。今のことについて何かご意見がありましたらお願いいたします。

(事務局久保田館長)

月森委員のことも私も確かに考えておるところなんです。確かに先ほどから若年層、子どもたちを多く連れて来たいよという言葉は言ったんですけど、一方でアンケートの中にはこの美術館に来て、ある程度落ち着いて、ゆっくり鑑賞できるそれが素敵なんだよというアンケートも数多くいただいている中で、そういった人たちも大切にしなければならないという中で、我々の美術館は、公立の美術館の宿命として来館者のバランスをどう受け入れていくかというの、今後の課題として考えていかなければならないと思っています。それプラス、芹沢銈介先生が静岡市の名誉市民であるということもあって、我々は公立の美術館として、市の名誉市民を若い方たちに伝えていくことも仕事になるものですから、そういうところで教育委員会を通じて学校へ芹沢銈介の魅力を伝えていくことも含めて、どういうふうに来館者をバランスよく受け入れていくかというのを課題としてこれから探っていきたいと思っておりますので、またお力をお貸しください。よろしく申し上げます。

(稲垣委員)

先ほど月森さんがおっしゃったことを踏まえてですが、私が小学生の時にこの美術館が出来まして、それこそ初めて行った美術館が芹沢銈介美術館で、本当にそのときからたくさんの小学生が見に行った中でこの仕事、今機織りをやっていて、数少ない生き残りみたいですけど、偶然たまにはいることもある。そのときにすごく印象があって、芹沢銈介という人がまだ当時は実際にいるんだなというのと、中学に入って亡くなっちゃったくらいだったんですけど、そのときに新聞に載って、あのかのときの美術館の先生死んじゃったというのを見ていたり、その後大学に行くときに自分が若いときに素敵だなと思ったことを覚えていて、市内で素敵な暖簾が掛かっているのを見て、それを作りたいなと思って美術の大学を目指すようになったんですけど、まず知っているのはすごく大事だと思うし、あと美術館に行ったときの印象はここに来たら静かにすることという締め付け。それがいいかどうかはわからない、他の人たちは騒ぎたいかもしれないし、生き残りは本当に少ないと思うのですが、種まきという意味では必要だなと思っていて。一つ思い出したことは、なんで自分がすごくいいなって思ったかという、その時の先生がすごい先生のファンだったんですね。すごく丁寧に説明してくださって、この作品はどうで一人で熱く語っているところがあったので、子どもたちはそんなに響いてなかったかもしれないですけど、その先生一生懸命だなとお話を聞いて思い出したことがあって、

なので先ほどおっしゃっていたように誰が連れて行くかという先生が連れていくので、まず先生を教育しなければいけない。美術の先生で芹沢銈介を知らない人もいる。私の友人の会というか美術の先生の個人でやっている勉強会があるので、そういうところで例えば誘致していただいて、白鳥さんから先生たちに教育を付けていただく、まずそっちからなのかもしれないなと思いました。

(大橋委員)

教員への教育もまた手間のかかる大変なことだと思いますけど、一つの今お話にあった種まきとして重要なのかなと思いました。よろしくお願いします。他にご質問ご意見ございますか。

(白井委員)

協議会の委員になってテーマは2つです。1つは、駐車場問題、もう1つは、石水館をもっと前面に出していく。前面というのはこの美術館は、建築としても重要な建物だということを芹沢さんの作品と共に皆さんに伝えていく、ということが私の2つのテーマです。毎年申し上げていますが、これについてはどのようにお考えでしょうか。

(大橋会長)

例年、駐車場問題等は意見を伝えていますが、回答が返ってこないままです。

(白井委員)

もう一回、私から強く申し上げたいんですけど、駐車場をできるだけ早く、いい形で解決していかないと、入館者数が増えないですね。グラフを見ても分かるんですけど、車で来る人が大半ですよ。そういう中でああいった400円で何時間でもオクケーみたいなそういう体制ってありえないということです。長時間いる人はそれなりに、また美術館に入った人は割引とか、そういう形にしていかないと、公立の美術館であることがしっかり美術館の姿勢として市の姿勢として、上手く機能しないのではないかと思います。それから建物ですけど、これは石水館、白井晟一さんの設計した非常に大事な建物で、「石水館 建築を謳う」という本がありますよね。あれは本当に素晴らしい内容で、建築自体がすごくドラマを持っていますし、その辺りを出していったら、感動もまた倍増していくのかなと思います。一つの試みとしては、「光の館」という試みがあって、私は去年初めて見させていただいたんですけど、お客さんがたくさん来ていました。これを年1回だけではなくて、暑い時は駄目かもしれませんが、季節のいいときに2回とか3回とかやっていく形で、だからカーテンを開けて中の噴水も見える、建物の中から見える仕組みを取り戻して、建物の魅力を市民の皆さんに味わってもらっていただきたいなと思います。その二つです。

(大橋会長)

いつもいただいているご意見ですけど、具体的な回答をまだいただいたことがないので。

(事務局久保田館長)

引き続き検討してまいりますので、よろしくお願いします。

(白井委員)

これは本当にもう何年もという話なんですよね。もう毎回毎年挙げていて先延ばしになっている状態ですよね。本当にその辺どういう状況なのかとか、可能性があるかとかを教えてほしいですし、石水館のことについても回数を増やせるかどうか、職員の数の問題もあるし、業務の問題もありますから大変だと思いますけど、改善をしていただきたいと思います。

(佐藤委員)

質問いいですか。素人なものですから教えていただきたいのですが、今の「光の館」の件、石水館の件に関して、私、実は参加したいと思って2度ほど予約したんですが、事情があって2度とも駄目だったものですから、拝見してないのですが、展示物は展示したまま石水館の公開をしているのですか。収集品とか作品が展示された状態で開放ということですか。

(事務局久保田館長)

夜間開館という形で6時から8時まで開けています。

(佐藤委員)

まったく素人ですみません。展示替えのときに中がきれいサッパリなくなるということは起こらないですね。

(事務局久保田館長)

ないですね。今回10月14日になりますので、次回の「芹沢銈介とのれん」の展示のときに会期が当たるので、その企画展を見ていただきます。

(佐藤委員)

展示物がある場合は、写真は撮れないですよ。要するに著作権の問題があって撮れないと私は認識しているんですけど、展示物がない部分で、ここはいいですよというのは、指定されるのですか。

(事務局白鳥主幹)

そうです。特にカーテンを開けて池を見ることができますので、その部分については可能です。

(佐藤委員)

本当にそれこそ響感を買いそうなんですけど、全く中身がない状態で石水館だけを写せるようなことが、もし展示替えのときにすっからかんになるのであれば可能かなと思ったものですから。でも、それは起こらないということですね。そういう状況にはならないですね。

(事務局白鳥主幹)

今の展示会のスケジュールでいくとそれは難しいかと思います。

(佐藤委員)

人員の関係もありますしね。

(事務局白鳥主幹)

一度撤去して、すぐにまた展示を始めなければいけないので。

(佐藤委員)

そうですね。日程の関係もありますし、無理ということですね。

(事務局白鳥主幹)

そうですね。その時間を設ければということになるかと思うんですけど。

(佐藤委員)

例えば1日限定で朝から夕方まで、いつ行っても石水館だけ見られます、みたいなことができればなんと空想の中で思ったんですけど、現実には無理ということでしたらそれはあきらめるしかありませんね。

(事務局白鳥主幹)

いや、何度か確かそのお話が協議会でも出たことがある気がするんですけど、その時間を設ければもちろん可能だとは思いますが。

(佐藤委員)

大変な労力がいるということですね。

(事務局白鳥主幹)

そうですね。あと、どこまで片付けるのかという問題があって、例えば、展示ケースとかその辺まで片付けてしまうのか。ただ、展示ケースはバックヤードにはほとんどありませんので、入れる場所がないんですね。だから、例えば別の倉庫などに持っていくのか。そのくらいまで考えて、やろうと思えばできないことはないかも知れないですね。今も展示会の期間がギリギリで展示会をやっていますので、それをプラスして休館を設けて、たぶんそういう展示ケースを移動したりとか、戻したりとかそういう時間も必要だと思うんですよ。プラス何日かその中で一日例えばほとんど何も無い空間にする。

(佐藤委員)

そうすると、主たる展示の期間が短くなるということになってしまうんですね。石水館だけを見せるための期間が必要になる。

(事務局白鳥主幹)

そうですね。一日だけでそれができるものでは、たぶん一日だとしても、準備に前後何日か必要になると思うので、そういうふうな計画でやればできないことはないのかもしれないし、芹沢銈介美術館というのは石水館とも言われていて、渋谷区立松濤美術館と同時期に建てられて、渋谷の方はその展示物を撤去した状態で白井先生の建物を見ていただく期間を設けていたので、それが全くできないことはないかも知れない、できないことはないですね。ただ、改修の時とかそういううまい期を捉えてやれたらできるのかもしれないなと思います。ただ私自身もそれにはちょっと興味があります。

(佐藤委員)

普段水を張ってないところがありますでしょう、中に。本来水を張るべき丸いところがありますけど、ああいうのに水を張るようなことはできますか、そういうときに。

(事務局白鳥主幹)

D室に噴水が本当はあるんですよ。だから、美術館の中に噴水、本当に展示物

のど真ん中ですので、非常に厳しくて、それは本当に開館の一番最初のときくらいじゃないですかね。当然展示物の虫カビの危険もありますし、ただそれ以来一度も水を出してないので、通るかどうかも分からない、40年以上出ていないので、その辺の確認も必要かもしれないです。

(佐藤委員)

非常に難しい問題があるということはよく分かりました。

(月森委員)

同じ美術館で働いている者として、以前に話したかもしれませんが、所蔵品、特に染織品などの場合は、温湿度、それから照度、紫外線の対応は非常に重要なんです。芹沢作品は染色品が多いですから、水分、噴水が館内にあるというのは普通じゃ考えられません。一緒に展示するというのは。カーテンを閉めているというのも、紫外線とか外の光がなるべく入らないしているためです。それから、名建築と言われている有名な建築家が建てている美術館が世の中にいっぱいありますよね。そういう美術館が中のケースだとか全部取り除いて建築物だけを見せるというのは私ももちろん興味がありますし、面白い企画だと思いますけど、それをおこなうには本当にすごい労力が必要になると思います。それをやることによって会期が短くなってしまって入館者数が減ったり、予算も非常にかかる、そういうこともあるという感じがいたします。

(佐藤委員)

本末転倒になりかねないですね。

(大橋会長)

この問題も毎回出ることはありますが、白鳥さんの今のお話を聞いているとやれないこともないけれど、やれない。本当にやるのだったら、人出や予算の問題が背景にどうしても出てくるんだと思います。それがあれば、例えば、年1回2回、可能性はあると思います。今、限られた人数で年4回の企画を展示撤去、展示撤去をやっているというのは、本当にギリギリなんだなというのを言葉の端から感じました。

(白井委員)

夜間開館の「光の館」。これ前回の協議会で前館長が年1回ではなくてもっと増やしたらどうかと自分も思っているというふうな言葉があったと思うんですけど、増やすことについていかがでしょうか。

(事務局久保田館長)

前回の議事録を見た中で、確かに夜間開館を増やされたらということもあったんですけど、私も来て夜間開館というのは1回しかやらないんだと思ったので、そういう意見があったということですが、できるんじゃないのというところで、今年も何回かということと話をしたんですけども、予算がどうしても今回に関しましては取れていない中で、まずは1回やるということで今年は決めました。ただ、前回のお話があったとおり、何回もやっても良いよねという中で、今年は自前で照明を仕入れたというところで、今後こういうのを含めてもう1回、2回できるか検

討しているところです。来年以降につきましても、1回ではもったいないよねというところがあるもので、何回かできるように考えていきたいなと思っています。

(大橋会長)

前回、その話が出たとき、年2回の予定もありましたけど、1回は実現不可能だと、予算の関係で結論としては年1回が限度だというようなお話だった記憶があります。それも含めて予算の問題になってくると思うんですけど、検討をよろしくお願いしたいと思います。あと、私の意見としましては、アンケートでも毎回何人かは素晴らしい建物だった。素晴らしい展示だった。その二つが合わさって美術館自身が美術品だというような言葉が毎回出てくるんですけど、僕はそれが芹沢銈介美術館の一つの基本だなと思っています。素晴らしい建物と素晴らしいけれども展示しにくい美術館に散々な工夫の末展示している、その全体が美術館なんだと。これが芹沢銈介美術館なんだという姿勢がとても大切なんじゃないかなと思います。

④その他

(大橋会長)

また別の話で何かご意見やご質問がありましたらお願いします。

それでは、時間がまいりましたので、今日の議会はこれで終わりたいと思います。長い時間ありがとうございました。

(6) 事務連絡

(7) 閉会